

成果報告書

【名称】自家栽培を通して自然の中の一部として生きる暮らしの探究

【場所】山形県・愛媛県・岐阜県・鳥取県・神奈川県

【活動目的】本活動の目的は、「食を育むことを通して自然の中の一部として生きる暮らしをつくる」ということの意味をさらに研ぎ澄ませていくことである。申請者は、2023 年度 4 月より、暮らしと自然との関係の紡ぎ方の実践支援について研究を進めており、実践の本質を言語化するパターン・ランゲージを用いて、実践知を明らかにしてきた。本活動では、自然の一部として生きるとはどういうことかの意味をさらに研ぎ澄ますべく、①畑や庭などの暮らしにおいて環境を共有し合うような意識で、さまざまな生命に働きかけを行いながら植物や環境を育てている 5 名のフィールド調査を行い、②作成しているパターン・ランゲージを用いた実践者の実践に関するインタビューを実施する。

調査協力者：井形 誠氏、懸田 剛氏、平野 馨生里氏、桐村 里紗氏、小島 希与子氏

【活動内容】

■命を大切にす文化を育てるという目的の元、農業という分野で仕組みづくりを行う、井形 誠氏の実践するフィールドの体験とインタビュー(山形県)

2024 年 6 月 22 日から 6 月 23 日：手がけているサクランボ農園やブドウ農園を訪れ、そこに生息する虫や植物の種類について教えていただいた。また、自然との関わりにおいて大切にしていることや、そのきっかけについてインタビューを行った。

■ソフトウェアエンジニアでありながら庭や畑でビオトープを育む、懸田 剛氏の実践するフィールドの体験とインタビュー(愛媛県)

2024 年 9 月 19 日：手がけている 4 か所（自宅の庭、自宅から 1 時間半離れた旧水田地帯、自宅から 1 時間ほど離れた畑、自宅から徒歩 10 分ほどの畑）を巡り、それぞれの環境に生息する虫や育っている植物、元々の環境についてインタビューを行った。また、作成中のパターン・ランゲージを紹介し、その感想を伺うとともに、懸田氏の実践について追加のインタビューを行った。

■洋品店を営みながら土とともに生きる平野 馨生里氏の実践するフィールドの体験とインタビュー(岐阜県)

2024 年 9 月 21 日から 9 月 26 日：平野氏が手がける藍染の作業や畑での様子を観察した。また、家族が野菜を収穫する様子や、子どもたちが畑に入り虫と戯れる様子など、日常的な自然との関わりを記録した。さらに、作成中のパターン・ランゲージを共有し、その感想を伺うとともに、平野氏の実践について追加のインタビューを行った。

■地域の中で「プラネタリーヘルス」を仕掛ける桐村 里紗氏の実践するフィールドの体験とインタビュー(鳥取県)

2024 年 12 月 16 日から 17 日：桐村氏が手がける公園における協生農法の実践フィールドを巡り、その場所をどのような思いで手がけているのかについてインタビューを行った。また、作成中のパターン・ランゲージを共有し、その感想を伺うとともに、桐村氏の実践について追加のインタビューを行った。

■小島 希与子氏の実践するフィールドの体験とインタビュー(神奈川県)

2024 年 4 月から 2025 年 1 月：小島氏が運営する貸し農園で畑作業を実践しながら、植物の育て方や畑との向き合い方に関する講習に参加した。また、小島氏のもとで働きながら、氏がどのように説明を行っているのかを観察した。さらに、作成中のパターンを共有し、その感想を伺うとともに、追加の実践インタビューを行った。

【活動成果】

- ・育てている植物だけでなく、その周囲の生態系を重視して観察している。(例：井形氏がブドウ農園を歩く際には、頭上に実るブドウの様子を確認するだけでなく、足元に生えている草の種類やその状態にも目を向け、ときにはしゃがみ込みながら畑全体の様子を丁寧に感じ取っている。)
- ・「何のためにその虫や植物がいるのが良いのか」ではなく、「そこに飛んでいたり、ただ存在していること自体が良い」と捉えている。
- ・実践者はもともと生き物が好きであるが、それぞれの出来事をきっかけに、現在の自然との関わり方に至っている。(例：懸田氏は、生き物の大量発生を経験した際に、食物連鎖や生態系のバランスを意識し、捕食者を含む多様な生き物が集まる環境をつくる必要性を感じた。)
- ・実践は、自身の暮らしの豊かさだけでなく、関わる人々のことも考慮されている。
(例：・一緒に暮らす家族が「食べたい」「調理したい」と思えるか・子どもたちが安心して土と触れ合えるか・自分たちが食べるものを育てる場所であるだけでなく、集落を守ることにもつながっているか)

【今後の展望】

本活動を踏まえて作成した「暮らしと自然の関係を紡ぐパターン・ランゲージ」を活用し、暮らしの中での自然との関わり方について探究し、まずは、自然と関わる機会が徐々に減少している大学生や 20 代を中心に、実践の支援を行っていきたい。

【謝辞】

慶應 SFC 学会の助成なしには、今回のフィールド調査およびパターン作成のブラッシュアップを達成することはできませんでした。心より感謝申し上げます。また、本研究にご協力いただいた井形 誠さん、懸田 剛さん、平野 馨生里さん、桐村 里紗さん、小島 希与子さんに深く感謝いたします。